

位相幾何学 期末試験 解答例

担当：入谷 寛

問題 1. (1) $L = \{(\ell, v) \in \mathbb{C}\mathbb{P}^n \times \mathbb{C}^{n+1} : v \in \ell\}$, $L \rightarrow \mathbb{C}\mathbb{P}^n$ は第一射影 .

(2) $\mathbb{C}\mathbb{P}^n$ の開被覆 $U_i = \{[x_0, \dots, x_n] : x_i \neq 0\}$, $i = 0, \dots, n$ を考える . U_i 上での局所自明化を

$$\varphi_i: L|_{U_i} \ni (\ell, v = (v_0, \dots, v_n)) \mapsto (\ell, v_i) \in U_i \times \mathbb{C}$$

と定める . このとき写像

$$U_{ij} \times \mathbb{C} \xrightarrow{\varphi_j^{-1}} L|_{U_{ij}} \xrightarrow{\varphi_i} U_{ij} \times \mathbb{C}$$

の下で元 $(\ell, v) \in U_{ij} \times \mathbb{C}$ は

$$(\ell, v) \mapsto (\ell, v(x_0/x_j, \dots, x_n/x_j)) \mapsto (\ell, vx_i/x_j)$$

と写る . ただし $\ell \in U_{ij} \subset \mathbb{C}\mathbb{P}^n$ の斉次座標を $[x_0, x_1, \dots, x_n]$ とした . 従って変換関数は $g_{ij} = x_i/x_j$ で与えられる .

問題 2 (10 点). $p: E \rightarrow X$ が被覆ホモトピー性質 (covering homotopy property) を満たすとは, 任意の位相空間 Y , 任意の連続写像 $f: Y \times I \rightarrow X$ および任意の $f|_{Y \times \{0\}}$ の E への持ち上げ $g: Y \times \{0\} \rightarrow E$ (すなわち $p \circ g = f|_{Y \times \{0\}}$ を満たす) に対して, 連続写像 $\tilde{f}: Y \times I \rightarrow E$ が存在して $p \circ \tilde{f} = f$, $\tilde{f}|_{Y \times \{0\}} = g$ を満たすこと .

$$\begin{array}{ccc} Y \times \{0\} & \xrightarrow{g} & E \\ \downarrow & \nearrow \tilde{f} & \downarrow p \\ Y \times I & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

問題 3 (10 点). (1) M 上の主 S^1 束とは, S^1 作用の与えられた位相空間 E と連続写像 $p: E \rightarrow M$ の組であって次を満たすもの . 任意の点 $x \in M$ に対して x の開近傍 $U \subset M$ および同相写像

$$\varphi: p^{-1}(U) \cong U \times S^1$$

が存在して

- φ は次の図式を可換にする .

$$\begin{array}{ccc} p^{-1}(U) & \xrightarrow{\varphi} & U \times S^1 \\ \searrow p & & \swarrow \pi_1 \\ & U & \end{array}$$

ただし π_1 は第一成分への射影 .

- φ は S^1 同変である . ただし $U \times S^1$ への S^1 作用は第二成分への掛け算で定める .

(2) 一般に M 上の主 S^1 束の同型類の集合は $H^2(M, \mathbb{Z})$ と同一視される . ここで $H^2(S^3, \mathbb{Z}) = 0$ であるから S^3 上の主 S^1 束は自明である .

(別解) S^3 上の主 S^1 束は D^3 上の自明な主 S^1 束 2 つを境界の S^2 に沿って張り合わせたものと考えることができる . 張り合わせの変換関数は $S^2 \rightarrow S^1$ なる写像で与えられるが, このような写像は定値写像にホモトピックである . 主 S^1 束のホモトピー性質から S^3 上の任意の S^1 束は自明となる .

問題 4 (10 点). $L \rightarrow M$ にエルミート計量を入れて単位円束 $S(L) \rightarrow M$ を考える. これは主 S^1 束になる. M の good open cover $\{U_\alpha\}$ をとり, $g_{\alpha\beta}: U_{\alpha\beta} \rightarrow S^1$ を $S(L)$ の変換関数とする. $U_{\alpha\beta}$ は可縮であるから $g_{\alpha\beta} = e^{\sqrt{-1}\varphi_{\alpha\beta}}$ を満たす \mathbb{R} 値関数 $\varphi_{\alpha\beta}: U_{\alpha\beta} \rightarrow \mathbb{R}$ が存在する. また $g_{\alpha\beta}^{-1} = g_{\beta\alpha}$ であるから, $\varphi_{\alpha\beta} = -\varphi_{\beta\alpha}$ となるようにとることができる. ここで Čech 2-cocycle $\epsilon_{\alpha\beta\gamma}$ を $U_{\alpha\beta\gamma} \neq \emptyset$ なる (α, β, γ) に対して

$$\epsilon_{\alpha\beta\gamma} = \frac{1}{2\pi}(\varphi_{\alpha\beta} + \varphi_{\beta\gamma} + \varphi_{\gamma\alpha})$$

と定める. $g_{\alpha\beta}g_{\beta\gamma}g_{\gamma\alpha} = 1$ より $\epsilon_{\alpha\beta\gamma}$ は \mathbb{Z} に値をとる. このとき, $\{\epsilon_{\alpha\beta\gamma}\}$ の Čech コホモロジー類を $e(L)$ と定義する.

(2) M の good open cover $\{U_\alpha\}$ を固定する. 直線束 L_1, L_2 に適当なエルミート計量を入れて得られる S^1 値の変換関数を $g_{\alpha\beta}^{(1)}, g_{\alpha\beta}^{(2)}$ とし, $g_{\alpha\beta}^{(i)} = e^{\varphi_{\alpha\beta}^{(i)}}$ なる実数値関数 $\varphi_{\alpha\beta}^{(i)}$ (ただし $\varphi_{\alpha\beta}^{(i)} = -\varphi_{\beta\alpha}^{(i)}$ を満たす) をとる. このとき $e(L_i)$ は Čech cocycle

$$\epsilon_{\alpha\beta\gamma}^{(i)} = \frac{1}{2\pi}(\varphi_{\alpha\beta}^{(i)} + \varphi_{\beta\gamma}^{(i)} + \varphi_{\gamma\alpha}^{(i)})$$

により代表される 2 次コホモロジー類である. テンソル積 $L_1 \otimes L_2$ に対応する同様のデータを構成しよう. $L_1 \otimes L_2$ の変換関数は L_1, L_2 の変換関数の積 $g_{\alpha\beta}^{(1)}g_{\alpha\beta}^{(2)}$ で与えられ, $g_{\alpha\beta}^{(1)}g_{\alpha\beta}^{(2)} = e^{\varphi_{\alpha\beta}^{(1)} + \varphi_{\alpha\beta}^{(2)}}$ が成立する. ここで $\varphi_{\beta\alpha}^{(1)} + \varphi_{\beta\alpha}^{(2)} = -(\varphi_{\alpha\beta}^{(1)} + \varphi_{\alpha\beta}^{(2)})$ である. 従って $e(L_1 \otimes L_2)$ を代表する Čech コサイクルは

$$\epsilon_{\alpha\beta\gamma} = \frac{1}{2\pi}(\varphi_{\alpha\beta}^{(1)} + \varphi_{\alpha\beta}^{(2)} + \varphi_{\beta\gamma}^{(1)} + \varphi_{\beta\gamma}^{(2)} + \varphi_{\gamma\alpha}^{(1)} + \varphi_{\gamma\alpha}^{(2)}) = \epsilon_{\alpha\beta\gamma}^{(1)} + \epsilon_{\alpha\beta\gamma}^{(2)}$$

で与えられる. 以上から $e(L_1 \otimes L_2) = e(L_1) + e(L_2)$ が示された.

問題 5. (1) $\mathbb{C}P^n$ の接束は $T\mathbb{C}P^n = \text{Hom}(L, \underline{\mathbb{C}^{n+1}}/L)$ で与えられる. また $\mathbb{C}P^n$ 上のベクトル束の完全列

$$0 \longrightarrow L \longrightarrow \underline{\mathbb{C}^{n+1}} \longrightarrow \underline{\mathbb{C}^{n+1}}/L \longrightarrow 0$$

に $\text{Hom}(L, -)$ を施して

$$0 \longrightarrow \text{Hom}(L, L) = \underline{\mathbb{C}} \longrightarrow (L^*)^{\oplus(n+1)} \longrightarrow \text{Hom}(L, \underline{\mathbb{C}^{n+1}}/L) = T\mathbb{C}P^n \longrightarrow 0$$

を得る. したがって

$$c((L^*)^{\oplus(n+1)}) = c(\underline{\mathbb{C}})c(T\mathbb{C}P^n)$$

であり, $c(L^*) = 1 + x$, $c(\underline{\mathbb{C}}) = 1$ より $c(T\mathbb{C}P^n) = (1 + x)^{n+1}$.

(2) F が滑らかな部分多様体を定めるという条件から F は $\mathcal{O}(3) \rightarrow \mathbb{C}P^3$ の切断としてゼロ切断と横断的 (transversal) であることが分かる. このとき完全列

$$0 \longrightarrow TV \longrightarrow T\mathbb{C}P^3|_F \longrightarrow N_{V/\mathbb{C}P^3} \cong \mathcal{O}(3) \longrightarrow 0$$

より

$$c(TV) = \frac{c(T\mathbb{C}P^3)}{c(\mathcal{O}(3))} = \frac{(1+x)^4}{1+3x}$$

が分かる. また V の Poincaré 双対は $e(\mathcal{O}(3)) = 3x$ で与えられる. したがって

$$\chi(V) = \int_V e(TV) = \int_V c(TV) = \int_{\mathbb{C}P^3} c(TV)e(\mathcal{O}(3)) = \int_{\mathbb{C}P^3} \frac{(1+x)^4}{1+3x} 3x$$

ここで $H^*(\mathbb{C}P^3)$ において $x^4 = 0$ に注意すると,

$$\begin{aligned} 3x \frac{(1+x)^4}{1+3x} &= 3x(1+4x+6x^2+4x^3+x^4)(1-3x+9x^2-\dots) \\ &= 3x(1+x+3x^2+\dots) = 3x+3x^2+9x^3. \end{aligned}$$

従って

$$\chi(V) = 9.$$

問題 6. (1) \mathbb{C}^{n+1} の標準的なエルミート内積をとる. 写像 $f: G(n, 2n) \rightarrow G(n, 2n)$ を次で定義すればよい.

$$f(V) = V^\perp$$

ここで $V \subset \mathbb{C}^{2n}$ は n 次元部分空間であり, V^\perp は V の直交補空間. \mathcal{Q} は自明束 $\underline{\mathbb{C}^{2n}}$ における \mathcal{V} の直交補束と同一視されるから, $f^*(\mathcal{V}) \cong \mathcal{Q}$ である.

(2) 連続写像 $f: G(n, 2n) \rightarrow G(n, 2n)$ が $f^*(\mathcal{V}) \cong \mathcal{Q}$ を満たすとき, Chern 類の自然性から

$$f^*(c_i(\mathcal{V})) = c_i(\mathcal{Q})$$

が成り立つ. $G(n, 2n)$ のコホモロジー環は $c_i(\mathcal{V})$ で生成されるから, コホモロジーに誘導される線形写像 $f^*: H^*(G(n, 2n), \mathbb{R}) \rightarrow H^*(G(n, 2n), \mathbb{R})$ は条件 $f^*\mathcal{V} \cong \mathcal{Q}$ から一意に定まる.

特に f を (1) で定義したものと仮定してもよい. $\{\phi_i\}_{i=1}^N$ を $H^*(G(n, 2n), \mathbb{R})$ の基底とし, $\{\phi^i\}_{i=1}^N$ を Poincaré ペアリングに関する双対基底, すなわち $\int_{G(n, 2n)} \phi_i \cup \phi^j = \delta_i^j$ を満たすものとする. 複素グラスマン多様体のコホモロジー類は全て偶数次数であることに注意する. ここでトレースの定義から

$$\mathrm{tr}(f^*) = \sum_{i=1}^N \int_{G(n, 2n)} \phi_i \cup f^*(\phi^i)$$

である. $\Delta \subset G(n, 2n) \times G(n, 2n)$ を対角集合, $\Gamma(f) = \{(x, f(x)) : x \in G(n, 2n)\} \subset G(n, 2n) \times G(n, 2n)$ を f のグラフとすると,

$$\mathrm{tr}(f^*) = \int_{\Gamma(f)} \sum_{i=1}^N \phi_i \otimes \phi^i = \int_{\Gamma(f)} \eta_\Delta.$$

ここで $\phi_i \otimes \phi^i$ は $G(n, 2n) \times G(n, 2n)$ のコホモロジーの元を表し¹, 授業で説明したように $\eta_\Delta = \sum_{i=1}^N \phi_i \otimes \phi^i$ は Δ の Poincaré 双対である. 一方 (1) で定義した f は固定点を持たないので

$$\Delta \cap \Gamma(f) = \emptyset.$$

従って η_Δ の代表元としてその台が $\Gamma(f)$ と交わらない閉微分形式をとることができる. よって

$$\mathrm{tr}(f^*) = 0$$

が従う.

注意. 最後の問題 6 の (2) は Lefschetz の固定点定理と呼ばれるものの例です. 詳しくは Bott-Tu の Exercise 11.26 をご覧ください.

¹これは Künneth 同型 $H^*(G(n, 2n) \times G(n, 2n)) \cong H^*(G(n, 2n)) \otimes H^*(G(n, 2n))$ の下での表示. $\alpha \otimes \beta = p_1^* \alpha \cup p_2^* \beta$ である.